環境大臣賞（優秀賞）

私達が担うべき使命

新潟県　新潟県立燕中等教育学校　三年　羽賀　詩彩

「この水道水は飲めるの」と、オーストラリアから我が家にホームステイにやってきた学生に尋ねられた。

「うん、飲めるよ」と答えると、彼は目を丸くして驚いていた。そして、コップに水を汲み、おいしそうに飲み干していた。

彼は、水道水をペットボトルに入れる時も慎重だった。水をうんと細くして、ゆっくりと注いでいた。オーストラリアでは、水は貴重なもので、飲料用にはペットボトルで買ったものを飲んでいるそうだ。それだけに、水はとても大切なものだという意識が強くあったのだろう。当時の私は、蛇口をひねり、水道水を飲むということが当たり前だと思っていたし、逆に水道から自由に水が飲めない国があることを知らなかった。だから、水道水が飲めるかということを確認した彼を、不思議に感じたのだ。この驚きの経験をして以来、私は世界の水事情について関心をもつようになった。

ＳＤＧｓの六番目の目標は、「安全な水とトイレを世界中に」というものだ。この目標の背景には、世界中に安全な水を使うことができなかったり、安全に管理されたトイレを使えずに生活したりしている人達が数多く存在するということを意味している。

学校でＳＤＧｓに関する学習をする中、私に最も強く訴えてきたのは、こうした発展途上国の水事情である。例えば、エチオピアでは、川で排泄をし、その川の水を使って洗濯までしているそうだ。それだけでなく、それを飲み水としても使っているので、衛生状態は悪い。その結果、感染症を引き起こし、命を落とす子供が毎年三十万人もいるとのことだ。私の想像を超えた現実はそれだけではなかった。子供は飲み水を確保するために、一日中水を汲みに行かなければならないのである。そのせいで、子供達は学校で学ぶこともできない。水問題は、衛生面の問題だけでなく、子供の未来をも奪うことにつながっていることにショックを受けた。

私達は毎日、水道から無限に清潔な水が出てくると思っている。そしてそれを使って、元気に学校へ行く。このような生活が当たり前である日本は、まさに「豊かな国」である。その豊かさを享受しつつ、その水を大切に使っていきたいと、その時は思っていた。

しかし、「豊かな国」は、決して誇れるものではないということを知った。あるテレビ番組で伝えられた事実を知り、私は驚きを隠せなかった。日本は食糧の多くを輸入に頼っている。その中でも日本国内で大量に消費されている肉は、海外の莫大な水と穀物を消費して作られていることを知ったのだ。私達の豊かな生活は、輸出国で水不足や食糧不足をもたらしている。遠い国の水問題が、急に身近なものに感じられた。それどころか、大きな悪影響を与えていることに愕然とした。

「豊かな国」である以上、私は担うべき使命があると思う。インターネットで調べた時、日本のある企業がアジア、中東、アフリカなどの水不足の地域で貢献活動をしていることを知った。日本の水道技術をそれらの地域に伝え、水道や浄水場などの施設を作っているそうだ。それにより、一日何千万トンもの真水を作り出し、生活用水や飲料用水として使われている。日本の支援により、わずかだが、水に関わる環境が整ってきていると感じる。このまま続けられれば、子供達も元気に学校に行けるようになると思うととても喜ばしい。

世界の水問題の一端は、私達にも責任がある。だからこそ、国や企業、個人で、できることから取り組むべきだと考える。それが、私達に課せられた使命だと感じる。日頃から水に感謝し、日本と世界の水問題は一直線でつながっているということを心に留め、水を大切に使っていきたい。